寄稿

この地に住んで良かったと思えるまちづくり
―東海村真崎区自治会―

茨城県東海村役場　村民生活部村民活動支援課　**高橋 大輔**

村の現状と課題

東海村は、茨城県の県庁所在地である水戸市の北東約15㎞に位置し、東京からは約110㎞の距離にあります。村域は、東西、南北とも約8㎞でほぼ円形に近く、総面積は約38㎢となっています。村内には、JR常磐線東海駅や常磐自動車道東海スマートインターチェンジがあり、国内外に就航路線を有する茨城空港へも、高速道路を利用し約45分の距離にあることから、首都圏をはじめ、各地への利便性の高い交通アクセスが確保されています。

昭和30年3月31日、旧村松村と旧石神村が合併し村政をスタート。昭和31年には原子力研究所の設置が決定し、研究機関や関連企業が集積し、最先端の科学技術とともに歩みを進めてきました。また、「東海まつり」をはじめとする新旧住民の交流や、昭和56年に姉妹都市盟約を締結したアメリカ・アイダホフォールズ市との交流などを通して、科学技術とさまざまな人や文化が融合したまちへと変化し、活気あふれるまちを形成しています。

そのような中、平成24年には本格的な地方分権時代の潮流に対応して地方自治の基本に関する事項を定めた「東海村自治基本条例」を制定。社会構造が大きく転換しようとしている中、住民主体による住民力を高め、住民主体のまちづくりの推進を目的に制定したもので、条文には、村民・事業者の役割のほか、自治会活動の推進について触れることで、村民及び村が自治会と、どのように関わっていくべきかを規定しています。

令和5年10月1日現在の東海村の人口は3万7837人。世帯数は1万6023世帯となっています。近年、全国的な少子高齢化問題が深刻化するなか、東海村においても出生数は減少傾向にありますが、自然減を転入者の増加による社会増で補っている状況で、全体としてはほぼ横ばいで推移しています。一方で、老年人口は一貫して増加傾向を示しており、2000年初頭には老年人口が年少人口を逆転しています。

今後、団塊ジュニア世代が65歳となる2040年に向けては、高齢者人口の増加、高齢者世帯の独居世帯・夫婦のみ世帯の増加が予想されています。このような社会的要因を背景に、地域福祉や防災など、複雑化する課題への対応の必要性が高まっており、これまで以上に地域による支え合いやまちづくりの在り方が重要となっています。

さらに、村内の自治会が抱える課題の1つに、自治会加入率の低下があります。今後もその傾向が続くことで、役員の高齢化と固定化が進み、自治会の担い手が不足し、自治会が弱体化することが懸念されています。そのような中、村内の26の認可地縁団体は、それぞれが特色ある活動を展開しています。

真崎区自治会の魅力あるまちづくり

■真崎区自治会の紹介

なかでも真崎区自治会では、地域資源を生

かした魅力あるまちづくりを展開しています。真崎区自治会（今泉謙二会長）は令和５年10月１日現在で、人口約３７００人、世帯数約１７００世帯で、認可地縁団体の中で３番目の人口規模となっています。自治会高齢化率は約24％で、およそ４人に１人が高齢者です。自治会加入率は約40％で、ここ数年はほぼ横ばいで推移していますが、全国の自治会の例にもれず、自治会加入率は真崎区自治会の課題の１つで、その向上に向けてさまざまな施策を展開しています。

真崎区自治会役員の皆さん

真崎区自治会では「この地に住んで良かったと思えるまちづくり」をビジョンに掲げ、「緑豊かな環境のもとで、災害に強く、共助を可能とする地域づくり」や「共創・協創を支えに、真崎区の将来を担う人づくり」に積極的に取り組んでいます。

今泉自治会長は「ライフスタイルが多様化する中で、特に若い世代には自治会の存在意義が見えづらいと思いますが、自治会を構成する本当の意義は災害時にあると思っています。災害発生時には、地域住民が連携して助け合うことにより被害を軽減できることを東日本大震災時に身をもって実感しました。イベント等を通じて地域住民同士のコミュニケーションの促進を図りながら、いざというときに備えての助け合いの仕組みづくりが大切と考えています」と話しています。

■真崎古墳行灯まつり

そのような想いで『まちづくり』に取り組んでいる真崎区自治会では、地域のシンボルとしている『真崎古墳群』で、さまざまなイベントを展開しています。『真崎古墳群』とは、真崎区自治会内にある、東西１５０ｍ、南北80ｍの範囲内に前方後方墳１基、六角形墳１基、円墳５基、方墳１基が残されている古墳群で、なかでも六角形墳は関東ではあまり類例が報告されておらず、関東地方の終末期古墳の研究に大きな意味を残すとされている貴重な古墳です。そのような古墳が鎮座する真崎古墳群での年間最大のイベントは、今年度で16回目を迎えた『真崎古墳行灯まつり（以下、『行灯まつり』）』です。

「全国で開催するまつりの多くは、山車やみこしが練り歩き、無病息災、五穀豊穣を願い、労働者をねぎらうものが多いかもしれませんが、『行灯まつり』は、新旧住民の親睦と融和を目的としたものです。50年前の東海村は、原子力施設やその関連施設の設置により人口が飛躍的に増加した時期でした。真崎区自治会もまた、その時期に急激に人口が増加したことから、新旧住民の親睦と融和が急務であり、そこで企画したのが『真崎まつり』でした。後にこのまつりの理念や目的は、地域を越えて現在の東海村にはなくてはならないまつり『東海まつり』の開催へとつながることになります。『東海まつり』の開催後、真崎区自治会はしばらくの間まつりの開催を見合わせており、その間、住民は手造りの山車をひいて東海まつりへ参加していました。しかし、17年前に『真崎まつり』の復活に向けて真崎区自治会の気運が高まり、実施方法等を変えて開催したのが『行灯まつり』です。『行灯まつり』とした理由は２つ。１つ目は、真崎区自治会の少子高齢化の進展を見据え『体力を必要とするきらびやかな山車やみこしが登場しなくて

も、まつりならではの非日常的な世界を作り出すこと』。2つ目は『子どもたちが大人になってもこのまつりを思い出し、故郷であるこのまちを思い出せること』でした。そこで、地域のシンボルともいえる真崎古墳群を利用して、家庭から出る天ぷら油の廃油からろうそくを作り、比較的容易に制作できる行灯に明りを灯し、真崎区内の小学校、中学校や商店街を巻き込んだ『行灯まつり』の開催を提案した」と今泉自治会長は話します。

『行灯まつり』は、毎年6月と8月に真崎古墳群の一斉清掃を実施した上で、8月下旬に開催されます。清掃は、自治会の人手不足を考慮し、自治会役員および班長の他、行政・各種ボランティア・NPO団体、民間企業などに協力を依頼しています。また、『行灯まつり』は、清掃の協力を依頼した団体などの他に、近隣の自治会・幼稚園・小学校・中学校にもまつりの運営や行灯の制作を依頼するなど、文字通り地域住民が一体となってまつり当日を迎えています。

日頃から真崎古墳群は、子どもたちの遊びの場、地域住民の散策の場となっており、幾つもの古墳が古代の風景を見せてくれる閑静でのどかな雰囲気のある場所ですが、まつり当日は早朝から多くの人で活気づき、とてもにぎやかになります。まつりの開幕を告げる号砲と同時に老若男女が来場し、太鼓やダンスを楽しみながらまつりを盛り上げます。新住民も旧住民も関係なく、ごくごく自然に交流が始まります。やがて、古墳群が夕闇に包まれるころ、『行灯まつり』はいよいよクライマックスを迎えます。辺りを照らし始める行灯のぬくもりある明りは、真崎古墳群全体を和らかく包み込み、幻想的な雰囲気を演出するのです。

真崎区自治会では、この『行灯まつり』の開催に向けて多くの人と時間を費やしながら当日を迎えています。このことは、地域づくりの視点から考えると、当然ながらその活性化に大きく寄与していますが、実はそれだけではありません。

歴史的価値の高い古墳群が、草や木の繁茂などで本来の古墳群の姿を失わずに地域のシンボル・憩いの場として地域に存在するという意義を高め、地域住民のみならず多くの村民が古墳群の存在や価値をあらためて知り、守り、それを将来にわたって引き継いでいこうとする機運の醸成にもつながっていると考えられます。

また、毎年、多様な参加者が主体となって開催することで、現代の社会的要因を背景に薄れがちになっている地域住民の連帯意識や地域に対する誇り、愛着を向上させる力もあるかもしれません。

「現在は、多様な価値観の中で、ネットコミュ

行灯の光が真崎古墳群を和らかく包む

真崎古墳行灯まつり

ニティの出現により、かつての地域コミュニティに頼らなくても幸福感を得られる社会になりつつある一方で、特に子育て世代や高齢者世代においては、顔見知りや気軽に声掛けができる地域の存在が求められていることも地域の現状です。このような中、まつりは『地域を一体にする力・強くする力』があると思うのです。また、子どもたちがこのまつりを夏休みの思い出の一つとして心のどこかに留めておいてくれれば、その思い出が子どもたちの愛郷心を育み、仮にこの地を巣立っていってしまったとしても、いつまでも真崎区を、そして、東海村を心のどこかで誇りと思っていてくれるのではないでしょうか」と今泉自治会長は話してくれました。

令和5年度の『行灯まつり』は、新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置付けが変更され行動制限が解除されたこともあり、約1100人の人出に達したそうです。これは

真崎区自治会・今泉謙二会長

真崎区住民の約3分の1の方々が参加したことになることを踏まえると、いかに地域住民にこのイベントが受け入れられているのかがよく分かります。

近年、まつりの衰退は時代の潮流の中でやむを得ないという声も多く聞こえますが、その形を変えながらも本来の目的を失わずに続いている真崎区自治会のまつり。まつりが持つ意義とその役割を見事に捉え、真崎区自治会のビジョンである『住んで良かったと思えるまちづくり』に大きく寄与しているイベントの1つです。

■真崎区自治会カレンダー

また真崎区自治会では、他にも自治会加入率の向上に向けてさまざまな事業を展開しています。その1つに『真崎区自治会カレンダー』の発行があります。

A4判両面見開きとし、自治会のイベント写真等を活用した真崎区自治会オリジナルカレンダーとなっています。自治会の会計年度に合わせて4月1日から翌年3月31日までとしており、自治会のイベントがひと目で分かるように余白部分に『今月の予定事業』を箇条書きするなどの工夫がされています。

日常生活に欠かせない資源物回収日や不燃ごみ収集日のほか、通学路上の危険個所なども掲載することで、自治会を意識してもらうものに仕上げているそうです。「自治会は住民一人ひとりの身近に必ずあるもの。いつも自治会を意識してもらいたいと考えて、このように仕上げた」そうで、「今年度で3年目となる取り組みです。皆さんに受け入れてもらえるか不安もありましたが、自治会員の皆さんからは好評をいただいています。毎年度このカレンダーを作製し、自治会加入者はもとより未加入者にも配布することで、自治会離脱の防止、新規自治会加入者の獲得へつなげていきたいと考えています。なお、次年度のカレンダーのコンセプトは真崎区自治会の今昔物語。時代とともに変わりゆくものや変わらずにあるものに思いを馳せていただくなど、カレンダーを通して少しでも真崎区自治会に興味を持ってもらえれば幸いです」と今泉自治会長。

そんな今泉自治会長に今後の自治会活動の展望とその秘訣を聞きました。

「自治会活動に終わりはありません。言い換えれば、自治会活動はいつも途上にあると思っています。でも、それがこの活動の魅力なのです。だからこそ、頑張ろうと思えるのかもしれません。活動の秘訣は…、そうですね、それは人を好きになることかもしれませんね」――。

真崎区自治会ホームページ
http://masakikujichikai.main.jp/